

「秃鷲」“Vulture”の復権 — G. Snyder の描く生態と神話 —

塩 田 弘

序

ゲーリー・スナイダー (Gary Snyder) は、自分の詩の神話的側面について次のように述べる。

私の作品の多くは、神話を織りなすものであり、それは叙情を織りなすものとは全く違ったものである。あるいは、儀式や魔法を織りなすものであり、それは単に歌を織りなすものとは全く違ったものである。(Real Work 20)

スナイダーは自作の詩を「叙情」ではなく、「神話」や「儀式」を織りなすものと述べているが、詩の中で描かれる自然や動植物が「神話」を構成する重要な要素となっている。そして、彼が遭遇した実際の経験に基づく自然や動物のシンボルを詩の中で描いている (Real Work 20)。自然界の重要性についてスナイダーは次のように述べている。

それぞれの鳥、植物、そして動物たちから特定の学ぶべきことがある — 自然界は全体的な教育である — 学ぶことは生存のために役立つと同様に、善悪の判断に関するものである。(A Place in Space 161)

スナイダーは自然界を「教育」とみなし、自然全体の中で、それぞれの動植物に学ぶべきものがあると考えた。作品の中で登場する動物については、一般には嫌悪の対象であっても、それが重要な存在となりうる。「秃鷲」“vulture”¹⁾はその最も顕著な例である。スナイダーが描く「秃鷲」は、単にそのイメージを喚起させる存在にとどまらず、生態系内での役割や神話的な次元で重要な存在となっている。

本小論では、詩集『ノー・ネイチャー』(No Nature, 1992) に収録されている二編の詩、「P. ウォーレンの閑職」“A Sinecure for P. Whalen”, 及び「霊鷲山にて」“On Vulture Peak”を中心に、その中で描かれる“vulture”「秃鷲」の意味と役割について考え、自然界の中での生物の位置付けと、その神話的な意味付けを探りたい。

I

スナイダー (Gary Snyder) は、学生時代のルームメイトであり、親友であるフィリップ・ウォーレン (Philip Whalen) についての詩「P. ウォーレンの閑職」“A Sinecure for P. Whalen”を

書いている。ウォーレンはスナイダーと同じように、かつてビート・ジェネレーションの詩人として活躍した後、日本で禅の修行を積む。アメリカに帰国後は本格的な禅僧としての人生を歩んでいる。²⁾ また、スナイダーとウォーレンは、いずれもジャック・ケルアック (Jack Kerouac) の『禅ヒッピー』 (*The Dharma Bums*, 1958) の登場人物のモデルにもなっている。このウォーレンをスナイダーは詩の中で、「秃鷲」 (vulture) に喩えている。

“A Sinecure for P. Whalen”

Whalen, curious vulture,
Picked the Western mind,
Ate the cataracted eyes
That once saw Gwion race the hag
And addle gentlemen

Still unfillded, he skittered to
The sweet bamboo
Fed green on yellow silt
And built a poem to dead Li Po.
The Drunkard taught him how to dance,
Leave dead bodies to the plants,
Sleep out nights in rain. (*No Nature* 314)

「P. ウォーレンの閑職」

ウォーレン、風変わりな 秃鷲、／まずは西欧の心をついばみ、／一度はグイオンが 女魔法使いを疾走させたり、／騎士たちを悩ませたりするのを見たという／その濁った眼を喰ったこともある／それでも満足できずに、今度はいとも軽やかに／甘い竹のほうに飛んでいくと／黄色い沈泥に緑を育て／死んだ李白について 詩一篇を書いた。／その酔っ払いは彼にダンスを教え、／死体は植物にまかせ、／夜は外で雨に打たれて寝るがよいと教えた。³⁾

“vulture”の第一義は「秃鷲」(ハゲワシ)であるが、ワシタカ科の鳥の総称でもある。「秃鷲」の習性については、死んだ動物の腐肉を食べる不快な行動パターンが、嫌悪の対象になっている。聖書でも、汚れた鳥として描かれる(荒川650)。また、ベーコン (Francis Bacon) は、「秃鷲」(vulture)と「大ガラス」(raven)は、海賊や暗殺者と同等に憎むべき姿とみなしている(ベーコン29)。シェイクスピア (William Shakespeare) も「秃鷲」“vulture”を劣悪非道な動物と見なし、シェイクスピアの作品の中で「秃鷲」は罪悪の象徴として描かれる(ハーティング 47-8)。『マクベス』(*Macbeth*, 1606)では「罪の意識」に、『リア王』(*King Lear*, 1605)では「不誠実」に、『ウィンザーの陽気な女房たち』(*The Merry Wives of Windsor*, 1597)では「悪巧み」に、それぞれ関連付けられる(ハーティング 47-8)。この鳥の名が修飾語として用いられると、「貪欲な行為」や「がつつする欲望」としての意味があり、英語の用法と

して定着している(48)。また、“vulture”の派生的な意味として、強欲な人、強欲冷酷な人、無慈悲な人、という意味がある。「秃鷲」はおそろしく評判の悪い鳥であり、鳥類学者たちも嫌悪感を抱いていた(クレール 178)。

このような「秃鷲」の悪いイメージとは対照的に、この詩において「秃鷲」は、神話的意味を持ち、同時に「秃鷲」がトリックスターシンボルとなっている。トリックスターとは、その自由奔放な行為ですべての価値をひっくり返す神話的いたずら者であり、文化ヒーローとしての道化である。トリックスターはしばしば、詐欺、背徳、などの悪の権化として登場し、マイナスのイメージを付与されて登場しながら、クリエイター(創造者)、あるいは文化英雄としてのプラスの意味をも与えられるアンビバレントな存在である(荒木113)。死体を啄む不気味な鳥が、スナイダーの詩の中ではトリックスターとしての肯定的な役割を果たすのである。スナイダーは自然界を「教育」とみなし、それぞれの動植物に特定の学ぶべきものがあると述べたが、神話の中のトリックスターについて並平は次のように述べる。

神話は、しばしば人間のあるべき姿を示すともいえるが、アフリカや北米インディアンの中に広がっているトリックスターの神話では、人間がおこなえば極悪非道とみなされるようなもろもろの悪行をハイエナやウサギのトリックスターがおこなう。しかし、それらの一見反道徳的な行為を通じて、神話は人間に聖と俗、日常的なものとは非日常的なもの、宇宙や世界の秩序と無秩序などについて人々に語りかけているのである。(並平 157)

このように、トリックスターは神話の中で、一見極悪非道とみなされる行為を通じて、人間にあるべき姿を語りかける。自然環境の中での独自の役割によって「秃鷲」は、人間にあるべき姿を語りかける存在なのである。

スナイダーはさまざまな動物をトリックスターとして描いているが、「秃鷲」以外の動物で、スナイダーの作品に頻繁に登場する動物はコヨーテ(Coyote)である。⁴⁾スナイダーの詩の中では、頻繁にトリックスターとしてのコヨーテが登場する。「コヨーテはトリックスターである。そのトリックスターは私たちすべての内面にある元型である」(*Real Work* 156)とスナイダーは述べている。さらに、「コヨーテという動物は、自然界のある特定の相互関係を表わす完全な存在である—西部の山と砂漠との間にいる適切な存在であり、そのトリックスターのイメージは人間にとってのある種の必要性にふさわしい」(*A Place in Space* 160-1)と述べている。トリックスターは、「二元的世界を総合する仲介者の役割」(山口 296)をも備えているが、「P. ウォーレンの閑職」では、西洋と東洋とが並列するかたちで描かれ、その間隙を埋める存在としてウォーレンを位置付けている。ウォーレンは、キリスト教の環境の中で育ち、やがて青年時代に禅に傾倒し、日本に渡る(Silesky 48)。このような経歴が、詩の前半に「まずは西欧の心をついばみ、」と書かれ、次に東洋へと移った様子が「それでも満足できずに、今

度はいとも軽やかに／甘い竹の方へ飛んでゆくと／」と描かれるのである。自由に西洋と東洋と横断し仏教僧になったウォーレンを、自在に変身する神話上の人物に喩えることによって、そのイメージを神話に重ね合わせるのである。

コヨーテは、ネイティブアメリカンの伝説でも、トリックスターとしてみなされているが、コヨーテが死肉を食べる習性において、「秃鷲」と類似している。また、コヨーテが修飾語に用いられると、「いやな奴」や「欲の深い奴」を意味する点においても、「コヨーテ」と「秃鷲」のイメージは共通する。スナイダーは、コヨーテに匹敵するトリックスターシンボルとしての「秃鷲」に友人を喩えることによって、文化を横断し新しい価値観を創造する「名誉職」、すなわち、詩の題名となっている「閑職」“sinecure”という賞賛を与えているのである。

この詩の三行目には「グイオン」(Gwion) という単語が出てくる。これは、ケルト神話の登場人物である。自在な変身能力をもち、さまざまな動物の姿に変身するなかで、その一つとして鷹 (hawks) に変身する。スナイダーは、「グイオン」が変身するワシタカ科の鳥として「秃鷲」(vulture) を位置付けている。ケルト神話の中での「グイオン」は、いろいろな生物に姿を変えながら、最後には一粒の穀物に変身する。穀物として食べられた後、再び若返った姿で生まれ変わる。「グイオン」は、生態的な構造を自在に横断し、仲介者としての役割を果たしている点で、トリックスターのイメージと重なる。このような点から、スナイダーはウォーレンを「グイオン」に喩えているのである。

II

スナイダーの「秃鷲」と同じ考えは、二十世紀前半のネイチャーライターであるメリー・オースティン (Mary Austin, 1868-1934) によって表明されている。彼女の代表作 *The Land of Little Rain* (1904) の三番目のエッセイ“Scavengers”「腐肉を食べる動物たち」では、コヨーテなどを含めた腐肉を食べる動物たちが描かれている。この章では、“buzzard”や“vulture”などの、一般には下等と見なされる鳥が重要な役割を果たし、中心的な存在となっている。“buzzard”と“vulture”はいずれも猛禽類の総称であり、前者“buzzard”は「ノスリ」「秃鷲」「コンドル」を意味し、後者“vulture”は「秃鷲」を意味する。オースティンは、これらの鳥の違いについて、「その年は“vulture”が“buzzard”と一緒にいたが、羽の下に白い斑点があることによって区別される」(17-18)と述べている。オースティンによるこれらの鳥の識別は曖昧であり、この二種の「秃鷲」は、非常に近接する種類の鳥であろう。

オースティンは、“buzzard”や“vulture”などと書かれる「秃鷲」の、腐肉を食べるその習性にプラスのイメージを付与している。オースティンは、次のように述べる。「羽を広げ、頭を垂れ、声をあげることなく砂漠の暑さに耐えている57羽の「秃鷲」“buzzard”(17)が、飢

えた家畜が死ぬのを辛抱強く待っている。三年間に渡る干ばつで、一年目に鶉が減り、二年目に麦が実らず、三年目に家畜が死ぬ。動物の数は、食料の量に比例するので、多くの動物や家畜が死に、それを餌とする「秃鷲」が繁殖する(17)。飢餓によって弱り死に向かう家畜と、腐肉を食べる鳥との間には悲劇があるとも述べられる。ゆっくりと死に向かい、死の恐怖におびえる家畜は、いったん倒れると数日後には確実に死ぬ。そして、家畜が死ぬのをじっくりと狙っていた「秃鷲」がその死肉をついばむ。野性の世界では、狩猟者でさへも、自然の法則によると狩られる存在となり、腐肉動物の餌となるのである(18)。自然界の相互依存のなかで、「秃鷲」は重要な役割を果たす不可欠な存在なのである。

オースティンが描いた「秃鷲」のイメージと同様に、秃鷲は多くの古代神話などで重要な役割を果たしている。インドでは「掃除屋」として従来から親しまれてきた鳥であり、古代エジプトでは女神ネクベクトの標章であり、また秃鷲の女神もいた(クレール279)。古代エジプト伝説では、死と再生を司るシンボルとして秃鷲が描かれている(キャンベル28)。また、アステカ文化においても、秃鷲が死の女神と共に描かれる(178)。さらに、十九世紀のチベットの宗教画、「転世の輪」では、転生を描く円の中心に秃鷲が描かれる。秃鷲は、生き物の最終段階たる死体を食べることで、死を司る存在と見なされている(407)。さらに、秃鷲が自然界の中での再生を司り、生命が転世を繰り返すための重要な役割を果たし、神話的、生態学的に自然の再生のシンボルとなっているのである。

命あるものが生まれて死んだ後、また新たな命が誕生する。自然界では季節の循環に応じて生命の循環が繰り返される。死と再生を繰り返す自然の中で、死は再生につながるものであり、それを司る重要な存在として「秃鷲」は位置付けられている。なぜならば、死体は新しい生命のための重要な栄養源なのである。死体をついばみ栄養として吸収することは、自然界の中では決して極悪非道なことではなく、自然界の法則に従ったことなのである。それ故、スナイダーは、こうした死体の再利用化に興味を持っている。死んだ生物が栄養となり、新しい生命として循環するために、「秃鷲」などの腐肉を食べる動物や、菌類、昆虫が重要な働きをしているが、この点においてスナイダーは、自然界のエネルギーの再利用を「悔悟した心」“thought of enlightenment”として位置付けている(*Real Work* 173-4)。死んだ生物量や、森林の堆積物、倒れた樹木、動物の死体などを再利用、すなわち、循環再生は、菌類や多くの昆虫によってエネルギーが開放されるとスナイダーは述べ、そのような自然の法則を芸術にも当てはめる(174)。自然界の法則と同様に、芸術によって、内的な可能性の再利用がされるとみなすのである。これは、人間の内面にある神話を再利用して詩を織りなすスナイダーの姿勢であろう。

III

スナイダーの詩「霊鷲山にて」“On Vulture Peak”の第一連でも、自然の相互依存の関係を司る存在としての「秃鷲」が表されている。ここではさらに仏教的な意味が付加されている。

“On Vulture Peak”

All the boys are gathered there
Vulture Peak, in the thin air
Watching cycles pass around
From brain to stone and flesh to ground,
Where love and wisdom are the same
But split like light to make the scene,
Ten million camped in a one-room shack
Tracing all the causes back
To Nothing which is not the start
(Now we love, but here we part)
And not a one can answer why
To the simple garden in my eye. (*No Nature* 329)

霊鷲山にて

すべての仲間たちはここに集められる／霊鷲山の薄い空気の中／過ぎてゆく循環をじっと見守っている／頭脳から墓石を、肉体が朽ちるのを／愛と英知が変わらぬところで／しかし、場面を織りなす光線のように分割し／一千万が一間の小屋に集り／すべての因果を辿り／はじめでない「無」に行き着く／私たちは愛し、しかし私たちも演じている／そして、その理由を答えることは出来ない／私の目に写る単純な庭に

この詩の題名となっている“Vulture Peak”とは、インドにある「霊鷲山」の英訳である。サンスクリット語からの漢訳であり、「秃鷲の頂き」の意味である。秃鷲が多く棲むことから名づけられたという説があり、そこで死体をついばんで環っていた（赤祖父 1634）。古代インドでは鳥葬の習慣があり、人間の死体を秃鷲に食べさせていたのである。釈尊は、この「霊鷲山」で法華経などを説いたことから仏典において馴染みのある山となった。浄土曼荼羅の中にも、「当麻曼荼羅略図」⁴⁾の中に「霊鷲山」は描かれている。「当麻曼荼羅略図」には、極楽浄土の景観を中心に、数多くの仏菩薩が一定の枠の中に描かれている。スナイダーの詩「霊鷲山にて」は、この曼荼羅のことを述べているのではないだろうか。分割された画面の中で多くの仏が描かれた様子を、「場面を織りなす光線のように分割し／一千万が一間の小屋に集り」と述べている。特にスナイダーは、生態系の中で重要な役割を果たしている「秃鷲」と、仏教の世界観を関連付けているために、曼荼羅の小さな部分である「霊鷲山」を強調している。「過ぎてゆく循環をじっと見守っている／頭脳から墓石を、肉体が朽ちるのを／愛と英知が変わらぬところで」と詩の中で述べられているように、すべての生き物が生まれて死ぬ様子と、

それを司る存在として「秃鷲」を暗示している。頭脳も肉体も、自然界の循環の中に位置している。「すべての因果を辿り／はじめでない「無」に行き着く」と述べることによって、あらゆる絶対的なものを否定する仏教の「無常」を主張している。永遠不滅の自我は存在せず、生命は循環の中にある。「私たちは愛し、しかし私たちも演じている」と述べることによって、日常生活を送る人間は、不変な自我ではなく「生滅変化する」世界の中で、一時的な役割を演じていることを示唆する。このように、「諸法無我」の仏教の思想が詩の中には描かれているのである。

IV

次に、スナイダーが「秃鷲」を (eagle) ではなく、(vulture) を用いた文化的背景を考えたい。「秃鷲」(bald eagle) の習性については、アメリカの鳥類学者で鳥類画家オーデュボン (John James Audubon) の記述からも明らかである。オーデュボンは、アメリカ合衆国の国章となっている「秃鷲」(bald eagle)、すなわち白頭鷲 (bald headed eagle) が、死骸の腐肉を食べ、他の鳥が集めた食べ物を横取りする性質を観察し、次のように述べている。「私が思うに、ハクトウワシをわが国の象徴として選ぶべきではなかった。あれは道徳をわきまえぬ性格の持ち主だ。正直な生活すらしめない」(140)。このように、鷲 (eagle) も秃鷲 (vulture) とおなじように、死肉を食べ、他の種類の鳥が捕獲した食べ物を横取りするずるがしこい習性を共有している。

「白頭鷲」と「秃鷲」の習性が類似しているのに関わらず、西洋文明において秃鷲 (vulture) が下等な動物として認識される一方、鷲 (eagle) は高潔な鳥とみなされている。ギリシャ神話や初期キリスト教の時代から鷲 (eagle) は特別な存在とみなされてきた。キリスト教象徴論においては、鷲 (eagle) はキリストの昇天、不死、使徒ヨハネを象徴する(赤祖父1634)。そして、ローマ時代から現在に至り、鷲 (eagle) は権力の象徴として用いられている(赤祖父1634)。アメリカでは、建国の使命を付加された白頭鷲 (bald headed eagle) は、合衆国の国印となり、金貨や紙幣にも描かれる(伊藤54-5)。この国章のなかで描かれた鷲は、左足に十三本の矢をつかみ、アメリカの国旗を思わせる十三本線があり、“E PLURIBUS UNUM”「多から一へ」を表し、合衆国を喚起させるものとなっている。スナイダーが、あえて (eagle) ではなく、(vulture) という鳥の名前を用いたのは、合衆国の神聖化に対して異議を申し立てているのである。スナイダーが、「アメリカ」について否定的な見解をもっている様子は、次の引用から明らかである。

さて、古代から続くこの大陸を呼ぶのに“アメリカ”とはあまりにも奇妙で礼を失するもの。(こ

れ、一度もこの土地を踏まなかった人間によって名づけられた。)ヨーロッパ系アメリカ人による、この大陸支配のぶざまな物語はここにはじまる。(『亀の島』V)

このような視点から、スナイダーは「アメリカ」という名称を廃して、ネイティブアメリカンの神話に基づくこの土地の名称「亀の島」の定着を呼びかける。「亀の島」とは、水から浮き上がってきた亀の背中についていた泥によってアメリカ大陸が作られたというアメリカ先住民の創世神話に由来するもので、スナイダーの代表作のひとつとしてピューリッツァー賞を受賞した詩集の題名となっている。また、スナイダーは「合衆国」に対しても否定的であり、政治的境界線や統合に異議を唱え、現状を変革する必要性を次のように示唆する。

統合は、世界部族会議のような形で。身勝手な政治的境界線をやめ、自然と文化に応じた区分に従う。(『亀の島』201)

スナイダーは、政治的な境界線を廃し、自然や文化の区分に従うことを推奨するが、これは彼が提唱する「バイオリージョナリズム」“bioregionalism” (生態地域主義)として環境保護運動として展開されている。これは、アメリカの建国以来、制度化されて来た国家制度を否定して、より地球の環境に密着した可能性を提唱するのである。スナイダーは詩の中で、「鷲」(eagle)ではなく、あえて「秃鷲」(vulture)を用いて、自然の生態系に応じた人間の位置付けを、神話的視点から捉えなおすのである。

結論

スナイダーの詩では、自然界のさまざまな動植物が描かれ、あらゆる地球上の生命への関心が表れている。従来、死体をついばむ不吉な鳥として嫌悪の対象だった秃鷲を、スナイダーは地球の生態と神話的レベルで捉えなおす。すると、繰り返し再生する自然のシンボルとしての秃鷲の様相が浮き彫りになる。常に変化して新陳代謝を繰り返す自然界の驚異と神秘を再認識させるのである。同時に、さまざまな神話体系や宗教を用いることで、一元的な支配的文化への依存を脱し、神話や自然界の法則に基づく世界観の構築を試みている。このような思想が、詩の中に描かれる生き物たちに色濃く反映されているのである。こうして描かれた生き物たちは、単なる詩的想像力の象徴としてではなく、人間に何かを教える存在となるのである。

注

- 1) 生物分類学的に「秃鷲」(Vulture)を定義すると、ワシタカ亜科(Accipitrinae)や、コンドル亜科(Cathartinae)に属する鳥の総称である。ワシタカ科は世界中に広く分布する中型から大型の昼行性の猛禽であり、238種に分類される。そのなかで、鷹(Hawk)、

秃鷲 (Vulture) に加え、鷲 (Eagle) の三者は、いずれもワシタカ科の総称であり、場合によっては恣意的に分けられるのみで、明確に区別するのは難しい。「世界鳥分類」(Sibley-Monroe 分類) のなかで、「熊鷹」の英語での鳥名が、“Mountain Hawk-Eagle” とあるように、“Hawk” と “Eagle” は鳥名に混用して用いられている場合もある。このように、「鷹」と「鷲」の境界線は曖昧なのである。

- 2) フィリップ・ウォーレンは、1923年オレゴン州ポートランド生まれ。第二次世界大戦従軍後、Reed College 在学中にスナイダーと知り合う。1960年代後半の大半を日本で過ごし、仏教修行に打ち込む。アメリカでは、タサラジャ・スプリングスやハートフォードの「禅山センター」で主僧を勤めた。また、これまでに多くの詩集や小説を発表している。(Halper 439)
- 3) 訳は、ゲーリー・スナイダー 金関寿夫、加藤幸子(訳)『ノー・ネイチャー』思潮社1996、を参照した。二編の詩の初出は、詩集『雨ざらし』(*Left Out in the Rain*, 1986) である。
- 4) スナイダーは *A Place in Space* のなかでは、コヨーテをトリックスターに位置付けた直後、鷹 (hawks) が自然の中でのサバイバルはもちろんのこと、モラルを教えてくれることを示唆している(161)。ポール・ラディンの『トリックスター』にも見られるように、「秃鷲」は「コヨーテ」同様に、トリックスター物語に出てくる動物である。この点において、「コヨーテ」も「秃鷲」も、トリックスターにふさわしい動物である。
- 5) 当麻曼荼羅は、唐の時代に日本にもたらされた浄土曼荼羅であり、そこには阿弥陀如来の浄土変相などが描かれている。奈良の当麻寺に現存する綴織で、縦横ともに四メートル程の大きさである。鎌倉時代から模写が盛んに行われた。(石田 7)

引用・参考文献

- Austin, Mary. *The Land of Little Rain*. 1903. New York: Penguin Books, 1997.
- Halper, John. *Gary Snyder: Dimensions of a Life*. San Francisco: Sierra Club Books, 1991.
- Jobs, Gertrude. *Dictionary of Mythology Folklore and Symbols: Part 1*. New York: The Scarecrow Press, 1962.
- Silesky, Barry. “The World of the Beats and Others.” Ed. Murphy, Patrick D. *Literature of Nature: An International Source Book*. Chicago: Fitzroy Dearborn Publishers, 1998. 45-51.
- Snyder, Gary. *A Place in Space*. Washington, D.C.: Counterpoint, 1995.
- _____. *Left Out in the Rain*. San Francisco: North Point Press, 1986.
- _____. *No Nature*. New York: Pantheon, 1992. [スナイダー ゲーリー, 金関寿夫・加藤幸

- 子訳【ノー・ネイチャー】思潮社，1996.]
- _____. *Real Work: Interviews & Talks 1964-1979*. New York: A New Directions Book, 1980.
- _____. *Turtle Island*. 1974. (対訳) ナナオサカキ【亀の島】山口書店，1991.
- 赤祖父哲二他編【日・中・英言語文化事典】マクラミンランゲージハウス，2000.
- 荒川章三【カラー版 聖書大事典】新教出版社，1991.
- 荒木博之「トリックスター深沢七朗」【ユリイカ】10 青土社（1988）：112-8.
- 石田尚豊【曼荼羅のみかたーパターン認識ー】岩波書店，1984.
- 伊藤詔子「アメリカン・イーグルの消滅と遍在」【英語青年】5 研究社（1992）：54-8.
- オーデュボン ジョン著・サンダーススコット編，西郷容子訳【オーデュボンの自然史】宝島社，1994.
- キャンベル ジョセフ，青木義孝他訳【神話のイメージ】大修館書店，1991.
- ケルーアック J. 小原弘忠訳【禅ヒッピー】太陽社，1975.
- クレーベル ジャン＝ポール，竹内信夫他訳【動物シンボル事典】大修館書店，1989.
- 並平恵美子「宗教と世界観」吉田禎吾編【文化人類学読本】東洋経済新聞社，1975，135-163.
- ハーディング ジェイムス，関本榮一・高橋昭三訳【シェイクスピアの鳥類学】博品社，1993.
- ベーコン フランシスコ，渡辺義雄訳【ベーコン随想集】岩波書店，1983.
- 山口昌男「今日のトリックスター像」ラディン，ポール他【トリックスター】晶文社，1974，279-306.

The Reinstatement of the Vulture: Ecology and Mythology in G. Snyder's Poems

SHIOTA Hiroshi

In Gary Snyder's works, birds, plants, and animals are depicted with some particular attention in order to elicit an interest in a specific set of natural relationships. Among them all, the vulture originally had a bad reputation as an ugly bird in Western civilization; however, Snyder rid himself of this impression. Then he reconstructs a new image for this bird by using old mythology and religions with a fresh approach, focusing on the natural environment.

In Snyder's "A Sinecure for P. Whalen," he compares his best friend, P. Whalen to a vulture. The vulture in this poem has a close connection to a Celtic mythological character, Gwion, which crosses a line and transforms into other life forms including a bird. Snyder suggests that Whalen and Gwion are equally matched in the ability to make peace among various aspects. As the title of the poem suggests, the vulture is a sinecure for Whalen who made a worldwide journey to become a practicing Buddhist and a poet, just like Snyder.

"On Vulture Peak," on the other hand, Snyder alludes to the image of Larger Sutra Mandala, representations of the Buddha, bodhisattvas and gods that make up the universe. Snyder takes the title, "On Vulture Peak" from a part of the Mandala, where Buddha is preaching, and Snyder takes from Buddhism the philosophy that teaches respect for all life and for wild systems.

The vulture is one of the most important birds in his works as an ecological scavenger as well as the mythological trickster and a symbol of the religion. Snyder does not judge things according to preconceived ideas of Western civilization based on man's control over nature. Snyder establishes an idea that all living things are subject to the laws of nature, through the environmental imagination. The vulture is of great value to the cycle of the natural world.